

山下翔歌集

『meal』

(現代短歌社)

人の気配をはっきりと感じる一冊だ。一つには、前作の第一歌集『温泉』から続く文語旧かなによる独自の文体の力。もう一つは、「きみ」や家族を軸とし、飲食を通じて人のありようを描くところだと思う。

とろとろのたこ焼きはあまき食べ物ぞ
口の中にも息吹きかけて
雪を逃れその人を逃れ母を逃れ松屋に
食べてあたり 牛めし

秋の夜の塩煎りぎんなんいつまでもき
みを思へり殻のうちから

作品中に登場する食べものは日常的なものが多い。毎日繰り返される暮らしの営みと飲食を通じて、ひとりの人の生の深いところまで読み手は降りて行ける。

あんなにも近づきたりしきみでさへは
なれてしまふ今朝とくに水が欲し
窃盗の父をむかへに行きしとき橋の往
来に雪ながれをり

感情そのものを言葉に乗せず、平易な言葉で人、風景、情動の気配を詠む。ひとりの人の、その人にしか纏えない空気がこの本には確かにある。
(斎藤 美衣)

立花開歌集

『ひかりを渡る舟』

(角川書店)

羽化を見ているかのようだ。柔らかな魂の少女が、その魂を守りつつ大人に成長する様子を、たどることができる。

傷つけ返せはしなかった日々 鋭利なるステンドグラスの光にさらす身

歌集の最初の一連「一人、教室」より。色彩豊かな光を「鋭利」とする。相手に傷をつけ返さなかったのは、優しさ故か臆病故か。少女の痛みが静かに且つ烈しくある。眼鏡なく涙を見やれば老犬は夕陽に溶ける美しき駒

手花火のバケツに海を盗み取り神のよ
うに火を落とす続ける

歌集中盤から二首。独自性の高い比喩が、作者の身の裡の深い寂しさを代弁する。飲食の果てに佇む石彫りの地蔵りいんと身体を冷やし

歌集終盤の歌。飲食の果て、死後の道には、物言わぬ地蔵が待つのだろうか。「りん」という語からは錫杖の音を連想した。一首一首読み進むごとに表現も思想も前へ進んでいく。視線や詠みに情性や隙間のない歌集。

(島本ちひろ)

永田愛歌集

『L-O-C-H-T』

(青磁社)

第一歌集『アイのオト』が二〇一八年に出されているから、第二歌集としては少し間隔が短い。だが『アイのオト』刊行時に既に次の歌集を編みたいという思いがあったと「あとがき」にある。それほどに詠みたい歌、読んでほしい歌が永田にはある。祖母はもうわたしの声が聞こえない

春のポストに葉書をいれる
いつかきつと歩けなくなる日がくるだ
ろう踝くるぶしのしたの凹くぼみも洗う

三人の甥なまこつ子つこの子もわたしの子と思
う遊びあそびを一生続けむ
悲しみにみちた歌集である。自身の進行性の足の病のために装具を使わざるをえない生活を続けている。そのことがもたらす、不安感、苛立ち、そして絶望、そういうものもろの感情を抑えつつ、永田は歌を詠む。

歌を詠むことこそが支えなのである。父や母を詠み、施設にいる祖母、元気な甥つ子たちを詠む。仕事に関わる歌も多い。悲しみは断ち切ることはできない。しかし、永田はひたすら詠み続けるのである。「光

(リヒト)」を求めて。
(鈴木 竹志)